１０月１３日（水）「やさしい関係」と「個性」

作成者：想田　瑞恵

想田（以下Ｓ）：やさしい関係のみで人間関係を作ろうとすると、行き詰まり、苦しくなるということが、先生の著作からよくわかりました。ではどうすればいいのかということで、先生は、異質な他者と関わることを訴えているのだと理解しています。具体的にはどうやって関わるのか、ということですが、檜垣先生は対話による関係を、土井先生は目的による関係を想定していると思ったのですが、いかがですか。

土井先生（以下Ｄ）：異質な他者と出会うことが必要なのはその通りですが、出会おうと思って出会えるものではないでしょう。そこで、まずはやさしい関係における同質な他者に目を向けるわけです。いくら自分と同質に見えても、他者は他者なのですから、ダイアログを深めていけば、違いはいくらでも見つかります。ただし、やさしい関係の中でいきなりダイアログをやろうと思ってもできないですよね。相手を傷つけないように話しているわけですから。同質な人間をバージョンアップしようと思っても、今のメンタリティの中でダイアログをやるのは難しいでしょう。

Ｓ：それはよくわかります。やさしい関係をベースにすると、ゼミでしんどい思いをしたりしますね。

Ｄ：ダイアログというのは、ダイアログのためのダイアログという感じで、それ自体が目的となっています。自己目的化していける人でないと、きついでしょう。ただし、異質な他者と関わることは、目的があればできるんです。目的は、学祭のようなイベントでも何でも良い。何か互いに向いている方向があると、ぶつかっても、実現したいという思いがあるから、やっていけるんですね。自分が見つめられているとか僕が見られていると思うから苦しいのであって、互いに目的を見つめていればいいわけです。

Ｓ：なるほど。ですが、常に相手と目的を共有できるわけではないですよね。むしろ、隣にいる人と同じものを目指せるほうが少ないのではないでしょうか。

Ｄ：今は、ネットというありがたいものがありますから。価値観は多様化していますし、つながれるチャンネルは多いでしょう。自分と価値観が似たような人というのは、ネットの世界でなら見つけやすいと思います。

Ｓ：それはそうでしょうけれど。以前の講演での映像でも紹介されていましたが、入学式前に関係を作らせて安心させる場を設けるという試みですね、そうした場をネットに移して、そこで関係を作っても、実際の関係をこなせるかどうかは疑問ですし、現実の場に目的を共有する人がいなくても、ネットの世界にはいる、という状態でいいのでしょうか。

Ｄ：現実がリアルで、ネットの世界はバーチャルというのは、年配の方の考えではないですか。ネットはリアルでない、という考えですね。

Ｓ：むしろ、ネットでの関係をリアルに感じすぎて重たくなる、ということが心配なのです。入学式で人間関係を作るのは負担だから、その前にネット上のコミュニティで慣らしておく。でも、そのコミュニティで関係を作るのも負担なので、それに参加しやすくする

ためのコミュニティをつくる。というように、解決にならない、負担は減らないのでは、という気がするのですが。
D：ロジカルにはそういうことになるでしょうね。でも、ネットでの前準備はそんなに負担になりますか。関係を作る準備の負担は、ネットのほうがずっと少ないでしょう。切り替えがしやすいわけですから。ネットの世界での関係がよくなれば、リアルな世界につなげることも、負担が少なくできるでしょう。
S：切り替えというのは、関係を切るということですか？同じ目的を共有できる人とだけ関係を作っていくと、同質な人とだけかたまったやさしい関係のように、行き詰ってしまうのではないでしょうか。
D：やさしい関係においても、行き詰るという状態はないと思います。関係をリセットして次へ、またリセットして次へ、というように、関係はいくらでも作れるわけですから。ただし、関係は深まらないですね。深まらないゆえに、関係を切り替えられる、リセットできるわけです。ネットはあくまでも道具ですから、どう使うかが問題だと思います。目的というものを手がかりにして、お互いの異質な部分を見つけられるのではないか、ということですね。お互いに共通の目標があると、その実現は相手も願っていることなので、相手に必要とされることになります。こうした自分が必要とされる実感は、自尊感情にもつながっていくでしょう。
S：自尊感情とは、自己肯定感のことでもあると思うのですが、先生は、関係が深まらず自己肯定感の基盤も不安定なやさしい関係では、やはりよくなくて、異質な他者の視点を取り入れたほうがいいとお考えだいうことですか。
D：社会学としては、やさしい関係に対して肯定も否定もしません。今こういうものが成立していると示すだけですね。ただ個人的には、関係は深まらないといけないと思っています。ですが、やさしい関係にもポジティブな面とネガティブな面があるわけです。やさしい関係ゆえに、関係が破綻しないというのがポジティブな面であり、関係が深まらないというのがネガティブな面ですね。やさしい関係において自己肯定感の基盤が不安定なのは、同質な他者との関係であるため、関係がバージョンアップせず、自己肯定感が相手の反応次第で揺らぐからです。相手が認めてくれれば肯定感が高まるし、否定されれば一気に低くなってしまう。
S：それで相手に認めてもらおうと、相手の言動一つひとつに神経を張り巡らせ、相手の言葉が自分を裁くもの、評価するもののように思える、ということですね。相手によるその場の評価をひどく重く受け止めてしまい、立ちすくんでしまうこともあります。
D：異質な他者とつきあうと、そこに逃げ場ができます。その場での評価が相対的に軽くなるわけですから。
S：全部が同質な他者との関係だと、一箇所で駄目なら、他も全部駄目だけれど、異質な他者と付き合うと、ここでは駄目だったけれど他ではどうかわからない、と思うことができるということですね。

D：そういうことです。講演で便所飯に関する映像を流しましたが、学食で一人で食べられないというのは、学校しか居場所がないと思っているからでしょう。別の世界での関係がないわけです。
S：私はわりと一人で食べることが多いのですが、そういうときは、オーラで「私は今あえて一人で食べているんだ」とか「友達がいないかわいそうな奴ではないんだ」というように主張しますね。すごく疲れます。
D：その主張は周りの人に対してですか。それとも自分自身に対して？
S：基本は周りの人へのアピールですが、自分自身にも言い聞かせている気がします。
D：筑波大の学生は一人で食べている人も多いし、あの映像ほど過敏ではないだろうと思っていたんですが、僕のゼミでもこういう感覚がわかると言っていた学生がいました。そういうものですか？
S：そうですね。私のオーラでの主張は共感してくれる人が何人かいましたし、一人で食べるときには、携帯を見ると話していた人もいました。それは私もよくやるのですが、私の場合は、手持ち無沙汰ではないんだという訴えですね。「やることはあるんだ、かわいそうな奴ではないんだ」と、周囲にアピールしなくては、という感じです。
D：その「かわいそうな奴」という感覚、誰かが一人で食べているときにも持ちますか？
S：そう言われると、別になんとも思っていないですね。
D：そうなんですよね。誰かが一人でいるときにはそう思わないのに、自分が一人でいるときには「かわいそうな奴」という感覚が出てくる。これはどうしてなのか、と学生と話し合ったことがありました。
S：どうしてなんでしょう。どういう結論になりましたか。
D：被害妄想じゃないか、ってことですね。どう思いますか。
S：被害妄想ですか。確かに、自分のことにしか関心がないし、心も頭も自分のことでいっぱい、ということはありますけれど。
D：そう、自分のことで手一杯なんですよね。だからまなざしが受動的になっている。自分は見てもらう側なんですね。見る側というよりも、見られる側という意識が強い。
S：「受動的」というのは、一つキーワードな気がします。関係においても、自分が誰かを認めるというより、誰かに認めてもらうことばかり考えているのだと思います。目的でつながる関係においても、このことが前面に出てしまうと難しいのではないでしょうか。つまり、異質な他者とつながれるような目的を誰かに用意してもらって初めて足を踏み出そうとする。安全が確保されるのを待っていては駄目な気がするのですが。
D：そうした場合の目的は、自分が欲している目的ではないでしょう。内在的なものではないんですね。例えば、鳥人間コンテストに出場するとします。そうしたら、より遠くに飛べるものを作りたいと、僕自身がそう思うでしょう。そういう欲望があるから、議論をすることがつぶしあいではなくなるわけです。人間関係を深めるために目的を与えてもらおうとしても、それは上手くいかないでしょうね。ですから、欲望を持てない人はどうす

るか、ということは問題になってきます。関係にしか関心が持てない人というのもいますからね。そういう意味では、スクールカーストでは下にいるようなオタッキーな人のほうがいいでしょう。人間関係以外のことに関心があるから、相対的に人間関係への関心が軽くなり、具体的なまなざしを気にしないですむわけです。人間関係に関心を持っているからスクールカーストでは上な人ほど、カーストの上がった下がったをひどく気にします。

Ｓ：私は、関係にしか関心が持てない人というのに近い気がします。例えばゼミにおいても、発言内容（勉強内容）よりも自分の関係や評価のほうに関心があるわけです。

Ｄ：自分の居場所が欲しくて、それを作ることに関心が行っている状態ですね。

Ｓ：そのとおりです。自分に居場所があるというのは、自分に価値があるということだと思います。私は、そうした価値が個性だと考えるわけです。私にしかできない考えがあるから、私には価値があるわけです。私の考えはあなたとは違い、あなたの考えは私とは違うということで話は終わっている。ですから、ゼミのように、どこがどのように違うのか、なぜ違うのか、と突き詰め、誰にでも合意される考えを目指すことに、どうしても抵抗を感じてしまいます。

Ｄ：それは、まさに社会的個性志向に対する内閉的個性志向ですね。本来、個性とは比べる人がいて初めて成り立つものです。他者との関係によって、そのつど独自性があるわけで、個性とは、関係の変数なんですね。相手との比較によって、独自性は変わり、個性は、決して固定的なものではありません。例えば、あなたが男子ばかりのグループにいたら、女子であることはあなたの独自性になるでしょう。でも、女子ばかりのグループにいたら、それは独自性になりませんね。周りがどういう人間であるかによって、あなたの独自性とは違ったものになってくるわけです。

Ｓ：では、就職活動中によく目にする個性や自分らしさというのは、何を指しているのでしょう。「あなたにしかできない仕事があるはず」や「自分らしさを発揮してください」と言われても、正直困ってしまいます。

Ｄ：それもおなじです。「あなたにしかできないこと」や「自分らしさ」といった独自性は、関係性の中で考えるべきでしょう。つまり、会社という集団レベルで、「私にしかできないこと」を考えるわけです。あなたにできることが例えば３つあったとして、この会社ではその中の一つが「あなたにしかできないこと」になり、別の会社では別のことが「あなたにしかできないこと」になるわけです。実際にできることは３つ以上あるわけですから、全部がかぶられるということは、完璧にロジカルな想定でしょう。自分とまったく同質な人間というのはいないはずです。

Ｓ：先生は、以前「自分の価値観が役に立つ場がどこかしらにある」という話をされていましたが、今おっしゃったようなことが理由なのでしょうか。けれど、自分のかけがえのない価値というのは、そんなに簡単にゆらいでしまっていいのでしょうか。

Ｄ：かけがえのなさに関するそうした不安は、現代人が持つ不安でしょう。あなただけでなく、みんなが持っている不安だと思います。昔は、関係とか集団というものが自明であ

ったため、そうした決められた枠に当てはまらないものが自分の独自性だと言えたわけです（文末図参照[i]）。ところが現代は、枠が流動化し、集団がいくらでも作れてしまう。結果、以前は自分が一箇所にしかいないから絶対的なものとして見えていた独自性が、集団が流動的になることで、相対的なものになってしまった。そこで、関係の外部に、固定的で絶対的な独自性を求めようとするわけです（文末図参照[ii]）。

Ｓ：関係の外部に独自性を求めようとすると、関係性という外ではなく、自分自身という内側にまなざしが向かうことになりますね。つまり、自分の内側に発生した感情を、自らの独自性の根拠として、純粋に保とうとするわけです。そして、自分の感情が比較され合意により独自性が消えてしまうことを恐れ、合意を拒否する一方で、自分の感情を触発してくれる他者は必要である、という矛盾に陥ります。そこで、他者と浅く付き合うやさしい人間関係で、独自性を維持しようとするわけです。

Ｄ：独自性が比較しないとわからないものである以上、それは不安の無限ループでしょうね。自分にしか根拠がなく、しかもそれは思い込みなわけですから。

Ｓ：しかも、そういう状態というのはひどく幼いと思うんです。自分にしか関心がない上に、他者に働きかけることによってではなく、誰かによって価値を承認してもらおうとしているわけですから。『人間失格？』（日本図書センター）のなかに、事件を起こした少年に、処罰感情の対象となる理性、つまり、自由意志が感じられず、未熟で幼く思えた、という話が出てきました。万引きすることもできたし、しないこともできたという自由意志があるから、責任も生じるわけです。こうした自由意志は、「他でもないこの私がそう行為した」という責任を引き受けることから生じるのではないか、という気がしています。そして、そうできるのが成熟した状態、大人だと思います。こうした責任というのも自己責任だと思うのですが、それは、『人間失格？』で問題になった切捨ての自己責任と何が違うのでしょうか。

Ｄ：切捨ての自己責任というのは、誰かに押し付けられた責任ですね。行為自体の責任を問うというより、相手を切り捨てる論理として使っている。切捨てる自己責任は、誰かによって出てくるものです。それに対して大人になる責任というのは、自分に内在しており、他者に向かうのではなく、自分に向かうものです。「僕が僕に責任があると思う」というように、自分を引き受けるものなんですね。自分に十分な責任があるというものではなく、単に相手を見捨てる論理になっているのが、切捨ての自己責任です。

Ｓ：自分に向かう責任というのは、受動的ではなく能動的、主体的ですね。やさしい関係においては、関係の維持が最優先であるため、意見が一貫していることはあまり重視されないと思います。それは、「自分が自分に責任がある」と思っていないということであり、一貫性のなさが不安定さにもつながるのでしょうか。

Ｄ：確かに、関係の維持が前提されているわけですから、御近所さんに、「いい天気ですね」と言われて、自分はそうは思わなくても「そうですね」と答える。別の人に「雨が降りそうですね」と言われれば、「そうですね」と答える。やさしい関係においては、自分の意見

は一貫していないと言えるでしょう。ですが、意見を一貫させ、責任を内在化させようと思い、「いい天気ですね」と言われて、「いや雨が降ると思いますよ」と言ったり、鼻が曲がっている人に対して、「あなたの鼻は曲がっていますね」と自分の思ったことをストレートに告げるというのはどうなんでしょう。正直ゆえに関係は崩壊しますよね。

S：自由意志というのは、「あなたの鼻は曲がっていますね」と言わないこともできるけれど、あえて言うということ、大人になる責任というのは、そう言ったことで関係が崩壊することまで引き受けるということではないのですか？

D：そのあたりは、「人生の知恵」というレベルの話である気がしますね。関係を壊してもいいという考えには、一人でも生きていけるという前提があります。でも、人は一人では生きていけないでしょう。そういう意味では、やさしい関係においても責任ということは問題になります。私たちは、関係に対して、関係を壊さないで維持するという責任をおっているわけです。

S：それは、やさしい関係を能動的に選んでいる、という状態でしょうか。選んでいるからこそ、関係を壊さない責任があるわけですね。

D：そうですね。「関係を壊さないでおきたい」という思いのもと、関係作りに能動的に関わることが大切でしょう。

S：ゼミでなら、テキスト購読に参加することが、関係作りに主体的に関わるということなのでしょうが、私は、テキストの内容に関する発言よりも、自分の関係を作るための発言をすることが多いように思います。

D：それは、そのゼミにおいては空気の読めない発言であり、受動的ですね。自分が関係作りに主体的に関わることをしようというのであれば、「テキスト購読というのはそのゼミだけの問題に過ぎず、テキストを読むより関係を作ることのほうが重要だと思うのですが」、というように、主張する必要があるでしょうね。

S：自分の意見を主張するということと、個を大事にするということをつなげて考えてみたいのですが、やさしい関係においては、主張された意見に介入しないで、人それぞれのままにしておくことが、個を尊重することだと思います。ですが、檜垣先生には「それでは本当に個を尊重していることにならないのでは」との指摘を受けました。土井先生は、個を尊重するということで、どういう事態をお考えでしょうか。

D：「介入しないやさしさというのもある」というのはその通りでしょうが、それでは関係がバージョンアップせず、深まることをしない。簡単に言ってしまえば、「変わらないままで、人生楽しい？」ということですね。人生は、思っても見なかったことや、意外な面が出てくるから面白いのではないでしょうか。さらに、今あるものを守ろうとするだけなら、追求するということをしないでしょう。

S：学問も成立しないということですね。

D：そうです。真理を追及する姿勢がないと、やはり人間は満足できなくて、必ず真理を欲求するのだと思います。だから哲学という学問も出てきたのでしょう。どこかで人間は、

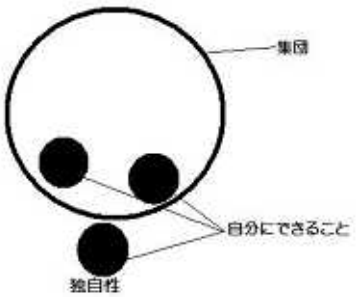
真理というものがあるはずだと思いたがっているのではないでしょうか。話が大きくなってしまいましたね。つまり、今の自分のまま、１０年２０年過ごしたくはないでしょう、ということです。
Ｓ：それはよくわかりました。たまに「昔に戻りたい」と言う人がいますが、私は絶対にそんなことはない。自分の中学・高校の頃なんて、恥ずかしくて仕方がないし、今のほうがマシだと、少しは成長できていると思えるからです。自分に変化をもたらすのが他者だと考えると、人それぞれという考えでは、自分の成長の可能性をつぶすことになりかねず、自分の尊重になっていないというのは、納得できたと思います。ですが、他者にはどうでしょう。相手に介入しないことが相手の個性を尊重することではないのでしょうか。
Ｄ：それは、最初からあきらめている感じですね。希望を持っていない気がします。人は、周りの人に希望を持っていたら、介入するしかないと思います。
Ｓ：それは、啓蒙するということですか？
Ｄ：そうですね。相手はもっと良くなるという希望を持っているわけです。ただし、難しい面もあって、歴史を遡って、キリスト教徒が「キリスト教によって人はもっと良くなる」と布教活動を行ったように、人はそうやって他者に希望を持ってもいいのか、という問題も、確かにあります。けれど、相対主義でいいのか、それで生きていけるかという問題もあり、啓蒙主義を捨ててはいけないでしょう。相対主義は、お互いのことを尊重しているようで実はそうではないということや、相対主義であっても何か絶対的なものを信じているのではないか、という指摘を、大澤真幸が『不可能性の時代』（岩波新書）でしていましたね。完全な相対主義というものに感じていた違和感を解消してくれたお勧めの本です。
Ｓ：読んでみようと思います。先生は、今のお話で、個を尊重するというとき、「変化」ということを強調されていたと思います。『人間失格？』の中に、「加害者のような環境に自分が置かれたら自分も罪を犯したかもしれず、たまたま良い環境に自分はいたから罪を犯していないだけなのかもしれない」というようなお話がありました。私は、これは、「人は変わることができる」というメッセージでもあると感じたのですが、いかがでしょう。
Ｄ：僕は、基本的に人間は弱い存在だと思っています。けれど、人間は環境の変数でもあるんです。「変わってしまう」と感じるのは人間の弱さですが、「変われる」と感じるのは人間の強さですね。その意味で、人は環境によって変わることができます。それなのに、犯罪を個人の資質の問題にして、与えられた環境に負けたら自己責任、というのはおかしいです。
Ｓ：確かに、ずるい気がしますね。
Ｄ：そう、ずるいんです。人間は誰でも弱い存在なんですよ。弱いんだけど、環境によって強くなれるんです。人間は、固いものではなく、やわらかく、変わっていけるものだと思っています。
Ｓ：けれど、人と深く関わることで、自分の独自性や価値といったものが揺らいでしまうので、変わることを恐れる気持ちもあります。

D：「変わってしまう」と考えるのは、変わる前の自分が完成体だと思っているからでしょう。だから、完璧で最高の状態である自分が傷つけられたという発想になるわけです。そうした内閉的個性志向においては、生まれ持った自分がすでに完全であり、最高の段階にあるわけですから、変化に対して否定的になります。同じ変化ということに対しても、社会的個性志向の場合とは、捉え方が違いますね。自分の内側にある独自性や価値を維持すべく、ずっと守りの姿勢でいるというのは、辛いことではないでしょうか。セキュリティの強化が、防御に次ぐ防御を招き、息が詰まってしまうのと同じことです。
S：確かに、人間関係を重たく感じてしまいます。ジャイロスコープや客観的ものさしというものを、『人間失格？』のなかで取り上げていましたが、そういうものを持つことができれば、人間関係における負担が少なくなるのでしょうか。
D：「ジャイロスコープから対人レーダーへ」というのは、リースマンの『孤独な群集』という古典からの表現ですが、ジャイロスコープや客観的ものさしが健在だった頃でも、他者のまなざしから自由だったわけでありません。ジャイロスコープや客観的ものさしというものが抽象的な他者として機能し、そうしたものに見られているという安心感があって、相対的に、具体的な他者のまなざしに感じる負担が少なかったかったわけです。時代によって、抽象的な他者が神になったり理念になったりしました。そうした理念が真理・真実である根拠は、僕の中にはありません。つまり、僕が思うから真理というわけではないので、他の人も同意してくれるだろうという安心感があるわけです。
S：抽象的な他者のまなざしとして、目的というものも機能しそうですね。
D：そうですね。個別な関係を超えたものとして、目的を設定するわけです。
S：そうした目的を設定することで、コミュニケーション能力というものさし、評価基準を、相対化することができるのですね。
D：先ほどの、学食で一人で食事ができないという話とつながりますね。学食という具体的な世界だけで考えていると、そこでのまなざしがひどく重くなる。世界を大きくし、そこからのまなざしを考えると、周囲の人のまなざしは相対的に軽くなります（文末図参照[iii]）。
S：世界を広くするためには、同質な人間ではなく異質な他者が必要ですよね？たとえ携帯メモリの登録人数が増えたところで、世界が広がった気はしないです。
D：その場合は、学食の世界が細分化されただけでしょうね。登録人数がそれだけいれば、彼らとちゃんとつきあうことができれば、世界は広がるでしょう。断片的な付き合いしかしていないと、広がらないわけです。
S：断片というのは、自分に都合がいいところとだけ付き合う、ということですね。
D：それも、今の、その場の自分に都合がいいところとだけであって、変わることを望んでいないんですね。そうやって人間関係を固定的にとらえると、社会学的には、婚活が流行るということが言えます。
S：婚活とどういうつながりがあるのですか。
D：婚活というのは、カタログから今の自分にあったスペックの持ち主を選ぶわけです。

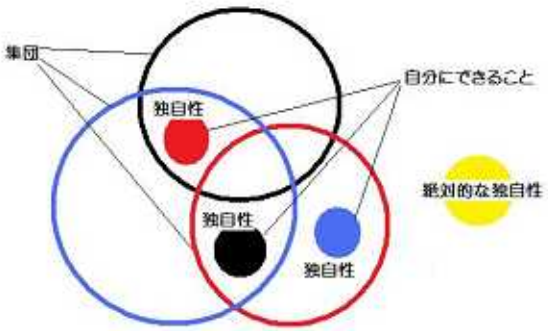
ですから、結婚をする時点が最高の状態なんですね。
Ｓ：あとはスペックが衰えるだけという。
Ｄ：そう。結婚によって自分が変わっていくという発想がない。電気製品を買うのと同じ感覚なんですね。

※※※※※※※※※※

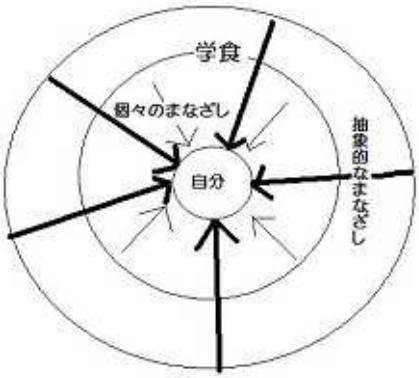
Ｄ：１年生のときは古代ローマ史の専攻を希望していたということでしたが、塩野七生さんの本を読んだりしますか。
Ｓ：ええ。『ローマ人の物語』（新潮文庫）で描かれるユリウス・カエサルは、本当にかっこいいと思います。
Ｄ：公共性という考え方はすごいですよね。
Ｓ：自分に自信があったというか、自分のことを信じきっていないと、なかなか出てこない発想ですよね。
Ｄ：先ほどのまなざしの考えが使えるのではないでしょうか。普遍的な他者のまなざしに見られているから、実体的な誰かさんのまなざしはあまり気にならないのでしょう。
Ｓ：具体的なまなざしではなく、もっと大きいまなざしによって支えられているわけですね。
Ｄ：そういうことです。他者一般によって支えられているという感覚が自信なのでしょう。



i



ii



iii

まとめ

具体的な他者に見られている、評価されているという意識が、被害妄想と呼べるほどに強い。これは、自己肯定感が具体的な他者の反応に依存しているからである。また、自分の内側に、自らがかけがえのない価値を持つ根拠があると考えているため、自分のまなざしも、常に自分の内側に注がれている。結果、他者の言葉に過剰に傷つきやすくなり、意見が変化することは自らの価値がなくなることと考えるため、合意を拒むことになる。このように、他者のまなざしをあまりに重く受け止めてしまうため、防御を繰り返すしかなくなるし、便所飯のような事態も起きてくるのだ。

こうした息苦しさを解消するために、自分に向けられたまなざしを相対的に軽くしたい。まずは、互いのまなざしを目的に向けることである。自分ではなく、目的を見つめる関係だ。共通の目的の実現は相手も願っていることなので、相手に必要とされる実感も持つことができて、自尊感情にもつながるだろう。そして、かけがえのなさの根拠を自分の内側に求めないことだ。真理の根拠が自分の内にないと思うからこそ、他の人の合意も得られると信じることができ、安定するのである。自分の内側にある根拠とは個性のことであるが（内閉的個性志向）、人と比較されない個性は自分の思い込みにすぎない。個性とは、関係作りに主体的に関わることで人と比較され、そうした関係の中に現れるものなのである（社会的個性志向）。

しかし、比較され変化するような揺らぐものが、かけがえのなさの根拠であっていいのだろうか。ここで問題になるのが、「主体的に」関わるということである。内閉的個性志向においては、「自分が見られている」という意識が強く、また「誰かに認めてもらう」ことに関心の重点があった。こうした受動的なあり方から、能動的に他者に働きかけることをしなければいけない。具体的には、「自分は、自分の関係に対して責任がある」と自覚することだ。これは、切捨ての論理として使われる自己責任と違い、自分自身に向かう責任である。ロボットがこうした責任を問われないのは、ロボットには自由意志がないから、もっと言えば、ロボットには変化の可能性がないからだ。対して、人間が自ら責任を引き受けることができるのは、自分が自由だと知っているからであり、その意味で、変化の可能性を人間は持っている。かけがえのなさの根拠とは、この変化の可能性のことではないだろうか。人をかけがえのない存在として尊重するとき、相手が変わる可能性を持っているからこそ、人は交換不可能な存在なのである。よって、この変化の可能性というかけがえのなさの根拠は、自分の内側ではなく、今の自分の外に求められねばならない。こうして、自分の内面に向けられていたまなざしが軽くなるのである。

課題としては、異質さの発見だけでバージョンアップになるかということだ。その発見をどのようにして自分の変化につなげるのか、明確にしたい。